

バドミントンにおける国際統括の形成に関する研究 1893-1949 年

A study of how the international governance of Badminton was established: 1893-1949

鷗木 千加子

Chikako IKARUGI

緒論

バドミントンは 19 世紀後期にクラブの設立が相次ぎ、1893 年に最初の統括組織であるバドミントン協会（以下、BA とする）がイングランドの南西部で誕生した。その後世界各地へと普及し、1934 年に国際バドミントン連盟（以下、IBF とする）が設立された。こうしたバドミントンの組織化は、多くのイギリスで誕生したスポーツと同様にブリテン諸島から世界に伝播され、いくつかのナショナル組織の設立に伴い国際競技連盟が誕生し、国際的な統括が形成されたという流れで説明できよう。しかしながら、組織化の具体的な実態については明らかにされておらず、バドミントンの国際統括の形成については十分に検討されているとは言い難い。

そこで本研究では、BA 及び IBF の内部史料（BA 議事録、IBF 議事録）、IBF 関係者による書簡、BA（IBF 設立に伴いイングランドバドミントン協会：BAE）公式機関誌等の一次史料の分析から、BA 及び IBF によってなされてきたバドミントンの国際的な運営の在り方を説明し、どのようにバドミントンの国際統括が形成されたかを明らかにすることを目的とした。

第 1 章 バドミントンにおける国際統括の形成の背景

【目的】

バドミントンにおける国際統括の形成の背景として、近代スポーツの組織化を概観しながら、バドミントンがどのようにして誕生し組織化が進められ、近代スポーツとしてのバドミントンが形成されたかを明らかにすることを目的とした。

【課題と方法】

先行研究から、以下の 2 点について検討した。(1) スポーツの組織化と国際的な運営 (2) 近代スポーツとしてのバドミントンの形成

【結果と考察】

イギリスで誕生したスポーツにおいて、民主的な機能をもつ統括組織が作られ始めたのは 19 世紀半ば頃から

であった。国際競技連盟は 1880 年以後から結成され始め、20 世紀前半にかけて整備された。イギリスで誕生したスポーツの国際統括においては、サッカーのように「母国」であるが故に世界への普及にさほど積極的ではなく、時に国際競技連盟との間に対立がみられたスポーツがあった。しかしながら、バドミントンの歴史特に国際統括の形成に関する研究は十分に行われておらず、こうしたモデルに回収されるものかの検討が必要であると言える。

バドミントンは、イングランドにおいて 1870 年代中頃までにルールをもつスポーツとして形成され、「クラブ」という組織基盤によって行われるようになり、1880 年代中頃にはクラブ対抗戦やトーナメントなどで競技的な活動がみられるようになった。しかし、ローカルルールでの活動はクラブ間の交流において混乱を生じさせ、競技規則を統一する必要性が高まり、1893 年にドルビー少佐の呼び掛けで開催された会議において BA が設立された。これによりバドミントンは競技規則を統一し、協会によって運営されるスポーツとなった。

第 2 章 バドミントン協会による国際的な運営の萌芽 (1893-1934 年)

【目的】

バドミントンにおける最初の統括組織として誕生した BA の役割と組織の在り方の変容を考慮しながら、バドミントンの国際統括の萌芽から IBF 設立までの過程を明らかにすることを目的とした。

【課題と方法】

BA 議事録、BA 公式機関誌を史料として用い、以下の 4 点について検討した。(1) BA による統括のはじまり (2) 拡大するバドミントンの活動と BA の運営の変化 (3) BA の国際的な機能の拡大と運営の変化 (4) 国際統括機能の独立の提案

【結果と考察】

競技規則を統一し、バドミントンを普及させることを目的として設立された BA への加盟団体は、BA 競技規則によるバドミントン活動が活発化したことにより増加

した。イングランド内においては、地域における自立的な活動が盛んになり、BA はカウンティ協会を傘下におくイングランドのナショナル組織としての実質的な役割を担うようになった。一方、BA への加盟団体は、イングランドを超えて広がっていった。BA 運営初期においては、ネーションという境界に囚われない個人的な人脈を通じた交流の実態が先にあったが、1899 年にアイルランドバドミントン連盟が設立され、1903 年にはイングランドとアイルランドの間でナショナル対抗戦が行われるようになった。ナショナル対抗戦は、その後ブリテン諸島内外へと広がり、BA はナショナル組織を傘下におき、国際的な交流の運営を担うようになった。

拡大するイングランド内の活動や国際的な交流は、BA がイングランドのナショナル組織であると同時に国際的な運営組織であるという二重の役割において、各々の機能を拡大させることになった。そうした運営の中で出現する支障や不満に対し BA は、実態に添うように協会規約を修正する等の「工夫」を重ねることにより対応したが、支障や不満を解消させた結果、BA がイングランドのナショナル組織であり、国際的な運営を担う国際競技連盟とも言える組織であることが明るみになっていった。それにより、更なる矛盾と、その矛盾から生じる不満を抱えるようになったのである。このように BA は、初期の目的で束ねるだけの任意団体から、カウンティ協会を傘下におくイングランドのナショナル組織と国際的な運営組織の二重の役割を担う組織へと変容したのである。1933 年には、これまでの運営の実態を運営体系として協会規約に明示することになった。

増加するナショナル組織やその交流は、ナショナル組織の自立意識をより高めることに繋がった。特に、加盟団体によるブリテン諸島を超えた積極的な活動が行われていたアイルランドと、ブリテン諸島で最後にナショナル組織を設立したことにより従来通りの運営の枠に収まることの難しさを経験したウェールズは、BA による国際的な運営に限界を感じるようになった。他方、国際的な交流に参加し、各地で盛んに行われるバドミントンの実態に触れたイングランドの G・A・トマス卿と E・ホーソンにより、更なるバドミントンの発展を志す意識と構想が BA の中にもたらされた。双方の思いは、インターナショナルボードにおいて重なり、BA 内での組織再編に留まらず、国際的な統括機能の独立という提案に繋がった。

これにより、バドミントンの競技規則の管理・運営と国際的な運営は BA を離れ、IBF による国際統括へ移行するという次のステップへと進むことになった。

第 3 章 国際バドミントン連盟による国際的な運営の確立 (1934-1939 年)

【目的】

IBF 設立初期において、どのように運営が確立され、バドミントンの国際統括の形成がどのように進められたかを明らかにすることを目的とした。

【課題と方法】

IBF 議事録、BAE公式機関誌を史料として用い、以下の 3 点について検討した。(1) IBF による国際統括のはじまり (2) バドミントンの活動の変化 (3) IBF の運営の変化

【結果と考察】

IBF は、それまで BA が担ってきたバドミントンの競技規則の管理・運営と国際的な運営の役割を移管し、国際競技連盟による国際的な統括を目指すために設立された。IBF 設立後のバドミントンは、IBF 主導の活動のみならず、個人、チーム、ナショナル組織によって普及・拡大された。こうした新たな国際的な交流は世界各地へとバドミントンの活動や組織化を拡大させ、国際的な統括の推進に寄与したが、活動や普及・発展の背景の多様さから、国際的な統括の在り方として何を国際統一基準にするかという課題を IBF に与えることになった。

IBF 設立は BA から提案され、IBF の運営は BA の民主的な運営方法を踏襲するものであったと同時に、設立時の主たる役員のほとんどはイングランドのメンバーであり、実質的な運営はイングランドによって行われてきたが、徐々にイングランド以外の役員や委員会の構成メンバーが増え、連盟の意思決定に「力」を持ち始める傾向に向かった。しかし、総会の投票権は相変わらずイングランドが過半数を超えて保持し、また 1938 年に事務局長に就任したイングランドの H・A・E・シェールは、全ての委員会メンバーとして名を連ね、IBF の中での権限を強めていった。

イングランド以外から出された幾つかの競技規則修正要請については、IBF 役員の「これまでの競技規則に関する姿勢を踏襲する」という姿勢から却下される傾向があった。しかし、カナダからの修正提案は、ルール委員会で検討されることになり、執行委員会の承認を経て、1939 年 7 月に競技規則の修正に至った。これらの競技規則変更の経緯の中で、それまで競技規則に関連する起案は加盟団体から出されるものとされていたが、執行委員会からも起案が可能であることが、連盟規約の解釈の合意という形で明確にされている。IBF の中には、「BA

的な常識」を踏襲しイングランドのバドミントンを国際的なスポーツにするという意志を貫きたい思い、世界各地の活動状況や要望を聞き入れバドミントンを国際的なスポーツとして統括しなければならないという思い、IBFの運営を担うイングランドのメンバーがIBFの進むべき方向性を牽引しやすい体制を整えたいとする思いが混在していたとみることができる。

IBF 主催の国際大会の設立については、1925 年及び1930 年のカナダ遠征を機にトマス卿の構想は膨らんだ。その構想は時間とともに徐々に設立の気運が高まりをみせ、1939 年 7 月に最初の IBF 主催大会としてトマスカップ大会の設立が決定した。競技規則修正を通して、イングランドとイングランド以外のバドミントンやその運営に対する認識に齟齬があることを感じていたトマス卿らは、先進的なバドミントン活動を行っていたデンマーク、アイルランド、カナダを大会運営規程作成に関わらせることによって、加盟団体の合意が得られる案を作成し、第一回トマスカップ大会開催を成功させようとした。

以上のように、IBF は各地の多様なバドミントン活動の状況や加盟団体の要望や感情を鑑みながら運営に修正を加え、国際的な運営を進めた。しかしその一方で、イングランドの役員が IBF の運営を牽引しやすい体制が構築されていったのである。そのことは、IBF の中に、BA 的な運営やバドミントンというゲームの在り方に対する考え方という BA の「体質」を踏襲しながら国際統括を形成する可能性を残すことになった。

第 4 章 国際バドミントン連盟の活動の危機と新たな運営の始動（1939-1946 年）

【目的】

第二次世界大戦勃発によりバドミントンの活動は停滞した。戦時下とその直後においていかなる IBF の活動が行われ、そのことが戦後のバドミントンの国際統括の形成にいかなる影響を及ぼしたのかを明らかにすることを目的とした。

【課題と方法】

IBF 議事録、IBF 関係者による書簡を史料として用い、以下の 2 点について検討した。(1) 第二次世界大戦下と終戦直後における IBF 役員の活動 (2) 第二次世界大戦下と終戦直後における IBF の運営

【結果と考察】

戦時下の IBF の運営は、会議開催等の主だった活動は休止されたが、会長トマス卿、事務局長シェール、財務担当マーサー（以下、トマス卿らとする）によって、IBF

の運営に関わる活動が書簡等により継続されていた。

IBF の運営は 1940 年 7 月 3 日の年次総会までは通常通りに続けられたが、1941 年の年次総会は開催されず、執行委員会が非常事態対処権をもつことになり、戦争による影響は IBF の運営に及ぶことになった。1942 年から 1944 年前半にかけては、更なる戦況悪化により、IBF 運営に関する活動は殆どなされていない、または極めて縮小されていたと推察される。1944 年 12 月には、IBF 年次総会開催に向けた準備が始められ、1945 年 12 月 13 日に執行委員会が、1946 年 7 月 3 日に年次総会が開催され、戦後の IBF の活動は再開された。

トマスカップ大会の設立は、1939 年 7 月 5 日の臨時総会で決定していた。その後間もなく戦争が始まったが、トマス卿とシェールは、戦争終結後の早い段階で大会を開催することを目論み、大会運営規程案の承認を目指した。しかし、戦争による影響のため、大会運営規程案は継続審議のまま公式の場での議論は途絶えた。そして更に戦況が厳しくなったことにより、大会の早期開催の希望は薄れ、加盟団体に及ぶ戦争による影響への対応に迫られることになった。

トマスカップ大会運営規程案の審議は滞ることになったが、シェールは、トマスカップ大会開催は制度を整えるだけでなく、参加チームの確保が必要であると考えていた。それには加盟団体の活動が維持され、IBF への加盟を継続させることが重要であった。そのため 1942 年から 1945 年は年会費を徴収せず、1940 年の年次総会の時点での加盟を継続することになった。これにより IBF は加盟団体を大きく減らすことなく戦後の活動を再開することができた。

また、戦時下において IBF は、戦争による影響のため活動ができない加盟団体への対応を行う一方で、戦争による影響を大きく受けることなく活動を拡大する動きへの対応も行った。ヨーロッパにおけるバドミントン活動が戦争による影響のため停滞する中、戦争初期にはカナダから IBF の運営継続の要請があり、戦争終結直前にはインドによる世界選手権大会の設立申請の動きがあった。それらに関するトマス卿とシェールによる対応は、IBF が BA の「体質」を引継ぎながらも、国際競技連盟としての IBF の運営の在り方を構築していく葛藤を反映していた。徐々にイングランド中心の運営体制への不満が顕在化し始めていたが、トマス卿やシェールも国際競技連盟として有べき運営の在り方を模索していたのである。

以上のように、IBF は戦争による影響のため会議開催は休止されたが、トマス卿らによって IBF の活動が続けられたことにより、IBF は大きく加盟団体を減らすこと

なく存続し、戦争終結後の活動をスムーズに再開させることができたことが明らかになった。これにより、IBFは戦時下における活動停滞期を乗り越え、その後のIBFの運営によるバドミントン活動の更なる発展に繋げることができたと言える。

また、トマス卿らの活動停滞期を乗り越えIBFの活動を早期に再開させた手腕と、国際競技連盟としての運営の在り方を模索し続けた姿勢は、戦後も彼らがIBFの運営の中心に留まり、その後1955年まで続く運営体制を確立した要因の一つであったと考えられる。それにより、IBFの運営は、戦後も引き続きイングランド主導で進むことになった。

第5章 国際バドミントン連盟による国際的な運営の発展 (1946-1949年)

【目的】

第二次世界大戦後に会議開催が再開され、その2シーズン後には主催大会である第一回トマスカップ大会が開催された。その間にIBFの運営はいかなる変化を遂げ、バドミントンの国際統括の形成がどのように進められたかを明らかにすることを目的とした。

【課題と方法】

IBF 議事録、BAE 公式機関誌、IBF 関係者による書簡を史料として用い、以下の2点について検討した。(1) 第二次世界大戦後のバドミントン活動 (2) IBF の運営の変化

【結果と考察】

IBF 設立及び第二次世界大戦を経て、バドミントンの競技力の世界図は大きく変わった。イングランド内においては大衆的なバドミントン活動は広がったものの、施設不足によりトップ選手の競技力は低下した。一方でデンマーク、インド、マラヤ等の競技力が向上し、イングランドが競技力において世界を牽引できていないことは明らかであった。そのような中で開催された第一回トマスカップ大会では、イングランドはデンマークにヨーロッパゾーン決勝で1勝も上げられずに完敗、デンマークとの決勝を制したマラヤが最初の優勝を成し遂げた。この結果は、大会前のバドミントン活動の状況からある程度予想されたことであった。つまり、トマス卿らは、バドミントンの競技力の「中心」がイングランドまたヨーロッパから離れることを受け入れ、バドミントンの更なる国際的な発展を目指したのであった。

IBF は、加盟団体からの要望により、国際大会のチーム構成や種目等に関して国際統一基準を定める検討をし

た。しかし、IBF 設立からの5年間で世界各地のバドミントンが多様な発展を遂げた上に、戦後に様々な活動の広がりを見せたため、加盟団体の活動の実態や運営状況に配慮し、国際大会の在り方については各加盟団体に裁量をもたせることが選択された。また、全英選手権大会の組み合わせに関してインドから出された苦情については、トマス卿はIBF会長としてBAEに対して是正に向けた検討を指示し、IBFがBAEの上位組織として国際的な運営を先導していることを示した。このような対応がなされたにもかかわらず、加盟団体特にカナダとアメリカ合衆国の「IBFがブリテンに支配されている」という感情は大きくなっていった。これに対してトマス卿らは、執行委員会メンバーの交代により、ブリテン諸島以外のメンバーが連盟の意思決定に更に「力」をもつことができるように対応したが、ブリテン諸島内がもつ総会での投票権数は相変わらず過半数を超えており不満の解消には至らなかった。

トマス卿らによるIBFの運営体制は、加盟団体の要望や感情に対して対立ではなく歩み寄る姿勢と配慮によって対応したことにより、長年続く運営体制を確立することになったと言える。それにより、バドミントンの国際統括は、引き続きイングランド主導で進むことになった。

結論

以上の通り、バドミントンはBAとIBFによって担われた国際的な運営により、国際統括の道筋がつくられた。イングランドは、自ら生み育てたバドミントンを「世界共通のスポーツ」として普及させるために、その国際的な運営を担う道を選択したのである。バドミントンはイングランドで誕生したスポーツであるが、世界への普及にさほど積極的でなかったとされるサッカー等とは異なり、自ら国際的な普及のために国際競技連盟の運営を主導し、国際統括の形成を先導したスポーツであったことが明らかになった。

その過程において生じたイングランドが「中心」であることに起因する支障や不満そして対立に対しては、譲歩と配慮そしてBAから踏襲された民主的な運営方法によって対応しながら、IBFはトマス卿らによる長期にわたる運営体制を確立したのである。すなわちバドミントンの国際統括は、BA的な運営基盤の上に形成されることになったのである。そのことは、イングランドで誕生しBAに育てられたバドミントンが、「世界共通のスポーツ」として継承される仕組みをもったことを意味する。

(指導教員：秋元 忍)